伊賀越に

山松の間〳〵や花のくも

ねぶたがる人になる見ぬそ朝櫻

たへまのまんだらを拜み

衣かへ自ら織らぬ罪深し

法隆寺にて

二王にもよりそふ蔦の茂りかな

生玉琴風園女の人と爲りを記して曰く此女むかしより世事に疎く紬下の紅絹を切て下駄の鼻緒を調へ張文庫の蓋を取りて水ながしに用るなんどその跡かたもなき事も風雅のうへの興なりけだし近き頃佛道に入て天窓を丸めたれど眞中を十筋ばかり殘せるも可笑し是れ唯一のむかしを忍る成べし斯の如き者ゆへ禪理も悟道せしにや自ら雲虎和尚に答る書にも

來書の赴拜見申候不求眞不求妄は大道根源誰も存ずる所憚なから珍からず候一心源頭に上ての所作柳は綠り花は紅る其儘にて常に句をいひ歌を綴て遊申候事に候無益の口業ならば一切經も無益の口業にて候法臭き事は嫌にて我平日の行は念佛と句と歌となり極樂へ行ばよし地獄へ行くは目出度し

和玉韻

自己念其不覓心清燈已耀一燈心市中點々有明鏡全識人間淸淨心

誰か見ん誰か知べき有にあらず

無にもあらぬ法のともしび

其才氣愛すべしとあり又其辭世に曰く

秋の月春の曙見し空は夢か現か

南無阿彌陀佛

園女は承應二年癸巳に生れ享保十一年丙午四月二十日に歿す享年七十有四或書には六十三とあり江戸深川靈岸寺中念佛堂に葬むる。

○

○花の前に顔はづかしや旅衣　○手くり船風は柳ゑ吹かせけり

○夜嵐や太閤樣の櫻がり
○木枯やつゝゐて啼し猿の聲
○ある程の伊達しつくして紙衣かな
○燕や巣の中せばき私語
戀○別れても夜の有たけは砧かな　地獄○せまり來て息ふく方や飛螢
○あるほどの品を盡くして火桶哉
○ぱつれ〳〵粟にも似ざる薄かな
○ひつたもの頭なでゝゐる寒かな
○玉笹の二ふし三節しみゞ哉
○小はらめや野分にむかふかゝへ帶
○鼻紙の間にしぼむすみれかな
○負た子に髮なぶらるゝ暑哉
○駒鳥の聲ころびけり岩のうへ
○そでかけて折らさじ鹿の袋角

◎山口素堂傳（第五十五）

山口素堂名は信章字は子達太郎兵衛と稱す今日庵又來雪は其別號なり甲斐に產れ一說には江戸の人とも いへ江戸に來りて本所に住す。

素堂好みて和歌の書を讀み博聞强記にして又詩文に巧みなり俳諧は北村季吟に學びて常に蕉翁と交はれり其什たる根源する所あるが故に高潔閑雅なるもの多し。

天性至孝なり人或は妻を娶らんことを勸むれども固辭して聽かず是れ老母の意に違はんを恐れてなり。

晚年深川に別莊を營み蓮池をうがちて交友を會し晉の惠遠が白蓮社に擬擬せり俳諧に社の設けあるは蓋し此に基くといふ。

素堂は寛永二十年癸未に生れ享保二年酉丁八月十五日に歿す享年七十有五江戸谷中感應寺後に天王寺中瑞香院に葬むる。

○

○浮葉まきば此蓮に情風過たらん
○雨の蛙聲高になるも哀れなり
○冬瓜に思ふこと書く月見かな
○三日月をたわめてやどす薄かな
○年もはや半流れつ御祓川
○棉の花たま〳〵蘭に似たる哉
後の月○唐土に富士あらばけふの月も見よ
○目には青葉山ほとゝぎす初かつは
○彌兵衛とは聞も哀れや鉢叩き
○長雨の雲吹き出せ背あらし
○ちる頃や明石の鯛の花ざかり
○澤瀉や弓矢立たる水の花

○旨すきぬ心や月の十三夜
○名も知らぬ小草咲さく野菊かな
○垣根破る其若竹を垣根かな
芭蕉追善○哀れさやしぐるゝ頃の山家集
○茶の花や利休が目には吉野山
○池に鷺なし假名書ならふ柳哉
○西瓜ひとり野分をしらぬ旦かな
○辻占の髭ぬく橋の小春かな
○我舞ふて我に見せけり月夜景
○市に入てしばし心を師走かな
○ふんさつて都の秋を下りけり

◎水間沾德傳（第五十六）

水間沾德通稱は次郎左衛門合觀堂と稱す江戸の人なり。

沾德少かりしとき中橋に住みて磨工なりしが俳諧を善くしまた舞曲に堪能なりしかば內藤風虎露沾二公の寵を受けて常に其邸に出入せり或年飛鳥井大納言雅章卿事に座して陸奥の盤城に謫せらる領主露沾公其愁鬱を慰せんが爲め沾德をして剃髮して名を友齋と命じて其側に侍らしむ既にして卿は赦に逢ひ歸京されしかば沾德も又江戸に歸り露沾公の旨を奉じて露葉と稱し後に沾德と改む。

沾德始めは露言を師とせしが終に一派を起して世人の推崇する所となれり又能書の聞へありて印に代ふるゝ文字を以てせり世の朱墨両點を加ふることは沾德を以て其嚆矢とす。

沾德は寛文五年乙巳に生れ享保十一年丙午六月晦日に歿す享年六十有三。

○

○諸物あれど魚にして鯛籠の花
○一尺のわらいの外や松かしわ
○春の野や木瓜は莚のしき合せ
○道〳〵はたばねてもちる杉菜哉
○鑓になり長刀になり杉の雪
○足跡の蛛手にあるやかきつばた
○擂につく子もさわ歸れぬむの花
○人の氣もかく寒し初さくら
是皆我子○似我蜂にならぬ子もなき彼岸哉
○百姓の茶のしきうちや桃の花
○五月雨や隣にわかる水のみち
○雪とけや都へ出し下駄のあと
○水と羽と合せ行鵜や夕すゝみ
○たが猫ぞ棚から落す鍋の數
○有明や二斗とる椎の梢より
○月鉾や松原西へ入佐山
○元旦も旅人を見る驛かな
○帶ほどに川の流るゝ汐干かな

◎秋色傳（第五十七）

秋色は江戸照降町の菓子商某の妻にして俗稱を阿秋といへり。

秋色性怜悧にして幼より風雅の志ありしが十三歳の時春花を見んとて東台に至り清水觀音堂の畢位にある井の端の大木の糸櫻を見て彼の有名なる

井戸端の櫻あぶなし酒の醉

の句を題し其枝に附け居さしに時の法親王殿下には深く文雅を好ませられたまひ日々山内の櫻に附けある詩歌俳諧を取集めて彼是れと評を下されしに此句最も透逸とは極りぬ是よりして此櫻を秋色櫻と呼做せり。

秋色或時一諸侯の召す所となりしが其別邸八竹樹泉石の美を以て都下に鳴れり秋色の父は好機會なりとて身を奴僕に扮裝し從ひ行きて意のまゝに觀覽せしが其節酒の上にて仝坐の武人秋色にたはむれをいふを

ものゝふの紅葉に耻ぢず女とは

の句を詠じ又歸途より雨いたく降り出せしかば侯家にてば籃輿を以て秋色を其家に送らせる然るに秋色は父の辛苦せるを見て舁夫に事を命じ其間に父と代りて己は雨笠を纏ひ簑笠を戴き扈從して歸りしを知るものとてはなかりしとぞ其孝順にして而も洒落なること此の如し。

其師其角は放蕩にして老後身を寄する所なく多くは己の家に起臥せしかば其歿後暫く其角の點印を用ひ已にして之を深川湖十に傳へしとかや。

秋色は享保十年乙巳四月十九日に歿す壽詳ならず。

○

○佛めきて心憎かるゝ蓮かな
○雉の尾のやさしうさねる蓮かな
○是ぎりと思ふ日もあらん相撲取
○曉を引板にかはる妻もかな
○雨たれに袖もあやめの句ひ哉
つゝじの名を○底白に紅粉はきのこすつゝじ哉
○戀せずは猫の心の恐ろしや
○蜆とり早苗にならぶ女かな
○交りを紫蘇の染たる小梅かな
○涼しさや日の落かゝる海の上
○ひとり居やしかみ火鉢も夜半の伽
○翠簾さけて誰か妻なら〻ん舟

始めて召され○見ぬかたの御園の瓜の汗ふかん　辞世○見し夢の覺ても色のかきつばた

◎捨女傳（第五十八）

捨女は丹波の國氷上郡柏原の人にして田氏の女なり。

捨女幼より聰慧にしてことに風雅の心に秀てたり六歳の時に。

雪の朝二の字〳〵の下駄の跡

といふ句を口ずさみ其のち家に聟を迎へ男子五人を生めり夫死して後は盤桂禪師を師とし

て尼となり貞閑と名づく俳諧をば北村季吟法師にまなび和歌をも兼ね學びたり後宮川松堅

に從て專ら俳諧を肄へり或年大守某侯江戸參府の途次故らに駕を其家に枉けられて

柏原にをしや捨置露の玉

といへる句を賜ひて大に賞美されしとかや。

捨子尼となりてのち道心堅固に佛の敎を守りしかば盤桂禪師も大に感じて己れの寺龍門寺

の傍に不徹庵をつくりて其處にすまはせたりといふ。

捨女或時自畫に讃して曰く

秋風の吹きくるからに糸柳

こゝろはそくもちる夕べかな

捨女は寛永十一年甲戌に生れ元祿十一年戊寅八月十日に寂す享年六十又五。

○

○粟の穂や身は數ならぬ女郎花　○日くらして捨て置ても暮るゝ日を

○雞煮煮や千代の數かく花かつは　○拜みたし涙くもらでねはん像

○泣にさへ笑はゝ如何にはとゝぎす　○うき事になれて雪間の嫁菜哉

○來る秋のきりぎすは見する一はかな　○思ふことなき顏しても秋のくれ

○吹なれて皆にもならぬ尾花哉　○雪の朝二の字〳〵の下駄の跡

◎千代女傳（第五十九）

千代女は加賀の國松任の人なり後年落飾して尼となり素園と稱す。

千代女幼時より風流の志あり支考の門に遊ぶ支考死して後は師を得ざりしが美濃の盧元坊

行脚して來りしかば其旅宿に行き志を述べて弟子となる其時

時鳥〳〵とて明にけり

の句あり（此の句に就ては種々の説あれどもしばらく千代女の作とす）又書は吳俊明を學びて両なから佳境に入れり。

千代女性温和にして淑良なりその作る所の句みな眞情を穿ち當時の男子者をして空しく啞然たらしめしと云ふ千代女又容顔美にして言語少く常に閑靜を好めり始めて夫に見ゆる時の句に

しぶかろか知らねど柿の初ちぎり

又子を失へるとき

蜻蛉つり今日はどこまでいったやら

の句あり又夫に別れしときの句に

起きて見つ寐て見つかやの廣さ哉

と詠せり眞に得易からざるの傑作なり或人書をかきて下に賛をと臨みけるに朝顔の垂れたる所を書きて

朝貝や地に咲くことをあぶなかり

と賛をつけたり其才氣のほど見るべし又或人いたく肥へふとりたる女の見憎くさを笑へば取なして一句

一とかゝへあるも柳は柳かな

乙由の方より安否を尋ねたる弥のはしに

花さかぬ身は靜なる柳かな

依て千代其返しに

花さかぬ身は狂ひよさ柳かな

又是は尼になりし後の事かとよ永平寺の長老千代の庵を訪ひて一念三千の意を句に作るべしとありければ

千なりも蔓一筋の心から

と即時に口ずさめるに長老も其妙達を感ずるのみなりしといふ安永四年九月八日死す享年七十有四辭世あり

月も見て我は此世をかしく哉

金澤專光寺に葬むる。

○

○朝がほにつるべとられて貰ひ水
○みよし野に闇一むすび柳かな
○手あぐれば結び目のなき清水哉
○鍋墨の行へはづかし杜若
○朝顔は其日にあふてしまいけり
○綿ぬきや初めて夜着の恐ろしき
○春の夜の夢みて咲や歸り花
○蝶々や女子の道の跡やさき
○福わらや塵さへけさの美しさ
○日の脚の道つけかへる茂り哉
○てふ〳〵の夫婦憑餘る牡丹哉
○紅さいた口もわすゝ清水哉
○目に結ふ谷間〳〵の清水かな
○落點や日に〳〵水の恐ろしき
○草むらのるすに風をく雲雀かな
○足あとは男なりけり初ざくら
○うき草や流れては又咲かはり
○わけ入れば風さへきゝて閑古鳥
○吹け〳〵と花に欲なし凧
○松風を植て聞たし雲の峯

○秋立やはじめて葛のあちら向
○瀧の下に葉をかざしてやつはの花
○淋しさの奥さかんより初時雨
○薄ちるや押分下るやまはうし
○遠近の山のわかりやむら紅葉
○はじめのは萩の音なり渡り鳥
○手の力そふる根はなし蕪ひき
○鋸でたゝいて見るや炭たはら
○秋立やきのふの花の青ふくべ
○夜涼や向ひの店は月かさず
○水仙やよく〳〵冬に生れつき
○夕がらすなく〳〵歸る枯野哉
○一ッ家に謠ひうたふや秋の暮
○蓮の實にはぢかれてたつとんぼ哉
○桐の實の吹れ〳〵て初時雨
○有たけに襟やかさねて冬牡丹
○老僧のつゑてすなかく松露哉
○初雁や比良で追つく帆かけ舟
○青雲にさきれてゝりの渡けり
○ねん佛の力の入るか大根引
○あきたつや四條河原も草の花
○いかにせん蛸の細道小雨ふる
○我身にも夕暮ありて涼みかな
○水仙は名さへつめたう覺へけり
○行秋やひとり身をもむ松の音
○癖になつて淋しや秋の今時分

○たけ狩やある道たいて物の中
○草鞋に椎はさまりて後れけり
○牛の目の光る山路や木下やみ
○菊さひてけふ迄のせわ忘れ鳧
○出代の名殘にはくや門のくち
○友減てなくねかいなや歸る厂
○帷子の脊中ふくるゝ風すゝし
○散れは咲れは咲して百日紅
○春風にいつまで栗の枯葉哉
○廣さはど霞もひろき野原哉
○分人は人の背戸なり山ざくら
○風どもに葉を吹出すや今年竹
○砂原のふくれをさかす松露哉
○もず鳴やはつか赤らむ柚の頭
○葉ざくらや寺中の人の聲斗り
○麥秋やうちも蚕の喰ふさかり
○出代の吾名を人にたづねけり
○初厂や幷べて聞くは惜い物
○先ッ馬の沓しめし行く清水哉
○春風や麥の中行く水の音
○若葉にも餘る白菱の根芹哉
○羽子板の箔でうけたり春の雪
○花が云ふ芝居見てくる人僧し

◎舍羅傳（第六十）

舍羅は其氏名傳はらず浪華に元祿の頃住みて貧と雅とには著名なる隱者なり。舍羅擔傾き壁破れたる茅屋の内に一妾一女と共に薦を敷きて其上に起臥し常に儋石の儲へなきも自若として風流を樂めり。

加賀の北枝其風流を傳へ聞き或年浪華に遊びて訪ひ來り雅談に時を移しけるに飲食の設けもなければ北枝は空腹に堪へ兼ねて何ぞ飢に充たすべきものありやと問ひければ舍羅は答へて云ふやう斯の如き貧家一物の貯へあることなし若し其紙袋に米あらんには炊きて呈すべしと北枝其袋を探り見て僅かに二合斗りもあるべしといへば舍羅は其米にて四人の腹を養ふべければ迚も十分には呈し難しといひつゝ炊ぎたり北枝は呆れながらも其の量の大なるに感じたりとかや又嘗て匂空に贈りたる書あり其文に

去るべき所に遊吟して歸り見候へば隱臥所に盜人入りたりとて邊りのともがら訪ひわめき候入べき所もあるべきに仕合のなき者にて候されど是ぞと心掛たるにや大切の盃なくなり候へば

盗人も酒がなるならをぼろ月

と申て打臥申候其頃惟然坊此の地に居られ候て

盗まれて手柄ぞ花に何所なりと

以て其人となりを觀るに足る晩年に及ひて剃髪せしことは東華坊の文にて徴すべし曰く

涙華の舍羅剃髪の前も舍羅といひていはつの後も舍羅と云ふ此舍羅を拾てゝどの舍羅をか求めむ舍羅〳〵として更に舍羅なし。

一たびは瓢の花のあたまかな

舍羅は其生死年月日詳ならず

○

○蒲の穂やこけかゝりたる軒のつま　○淋しさをさそひにきたか蟋蟀

○二三日内にも居らず猫の戀　○白菊の揃ふた畑や九月盡

○雪ふりや堤にかゝる片いざり　○初雞のあしたくや無盡藏

○燕や子を居ふ身のひまもなし　○押合ぬさきにちりけりけしの花

○落つかぬ空なり宵の時鳥　○立ならぶ木も古びけり梅の花

○手も出さで机に向ふ寒かな　○深閑と星崎寒し草まくら

涼菟に琴ねられて○萩盛の友達や此したらくさ

◎建部涼岱傳（第六十一）

建部涼岱は吸露庵と號す初め葛鼠と稱し又其北國に在りしときには都因ともいへり。

涼岱少かりしとき野坡に從て俳諧を學び既にして加賀に遊て希因を師とし又伊勢に至り梅路に就て附句を習へり後に江戸淺草寺の門前に居を占めて雷神門の神風が袋を負へる樣の竿可しとて俳號を涼岱となし其俳諧を廢して片歌を唱ふるに方りては涼岱或は綾太又は綾足と稱し又畫には寒葉齋の號を用ひたり。

涼岱才氣人に勝れて能せざる所なしといへども事毎に厭忌し易くして俳諧に遊ふかと思へば何時か繪畫を業とし乍にして僧となり又乍にして還俗し終始功を全ふしたるもの一もあることなし其著はす所の書に西山物語、吉野物語あり。

凉岱は享保四年乙亥に生れ安永三年甲午三月十八日に歿す享年五十有六。

○

○蠶の蛟の夢や一筋芋の蔓
○たま棚や灯せは外へ草のかげ
○川普につれて鴨出す河鹿哉
○立寄を見て追つけば清水哉
○秋はきぬ露むす萩と葬に
○村〳〵は茶色に霞む小春哉
○吹かたへ心の多し女郎花
○こきまぜて櫻も淋しかれ柳
○市中や馬にかけゆく紙鳶
○燕や歸りかゝれば猶早し
○浦のはる千鳥も飛ず明にけり
○海を出てぬるゝ月日や五月雨
○祇園迄顔は日蔭のあふぎ哉
○下を見る事を忘るな揚雲雀
○蝨にもよらぬ日のあり猫の戀
○うき人に臂はりかけて田植哉
○竹婦人いふにまされど淋しさよ
○草庵を結びし時○笠はどな庵とをもへ初時雨
○あけぼのゝ色て來にけり初鰹
○旅人のまた日はあり雉子の聲
○蚤を追ふこゝろや庵の芳野迄
○水吸のすゑては置す榎の月
○秋にたゝあき一ぱいの月夜哉
○梶の火や家廣〳〵と更て行
○唇て冊子かへすやふゆごもり

◎生玉琴風傳（第六十二）

生玉琴風は別號を柳蘿架といひて大阪の人なり。

生玉琴風俳諧を好み江戸に來りて蕉翁の門に入り翁歿して後は其角に師事して遠吟の名を得て世に琴風。百里と並稱せらる。

琴風翁の奥の細道をうらやましく思ひ享保八年二月松島に旅行せんとて旅行の催しをせしに院水公より

汝が旅行のと在前にきこゑはべりて餞別の句ちさるはつねの年よりれもしろく待ぞとよまて松島の物語り

江戸俳友大勢ひせんべつの中にその女

稽の外の咄しまつしま柳かな

百里も餞別に

みちのくや花着て歸れ道の句に

冠里公餞別

うしろすがた雁歸るの姿かな

芩風は享保十二年丁未二月七日を以て歿す享年詳ならず江戸本所押上春慶寺に葬むる。

○

○篝火に見ゆ　や鵜飼の貞ばかり

○いく程ぞ日南追ひ行の蠅

○帆ばしらのつら〻見ゆすく旭哉

○寒食やいはけなき子にすねらるゝ

寄布袋蝶○いざや蝶負さ身するも舞の袖

○みゝつくの眠り落たる柳かな

○鑓持のふりまはさるゝ野分かな

○かいすくみいつも寐貞の鵜かな　辞世○一いきに此あじはひぞ春の水

◎大淀三千風傳（第六十三）

大淀三千風は伊勢の人なり佛門に歸して呑空と名づく寓言堂また無不非軒の別号あり。性聰敏にして幼より俳諧を嗜み成童の時已に遠吟の名ありたれども嘗て師に就て學べるにあらず獨學以て之を到せる所以なり延寶年間獨吟三千句を爲し因て自ら稱して三千風といへり。

四方に行脚して奥の仙臺に留まること十五年再び故郷に還り既にして又出て相模の大磯に赴き其地に西行庵を營み其傍に曾我祐成の妾虎女の像を安置して鳴立澤の古跡を存し碑を建て〻自ら東住居士と稱せり蓋し此の費金は悉く三都の娼妓に勸化してこれを費りたるものなりといふ

三千風の歿年は詳ならず其行脚の首途日即ち四月四日を以て命期とすべしとて左の辭世をも遺し置けりとぞ。

無始以來行脚の宿の喰逃を
今六文で木賃すつめり

○

○三日月を踏へて落るひばり哉　○一聲や犬西行にはとゝぎす
○奥の院何やらものが呼子鳥　○花にこよと笠たゝかるゝ一薬哉
○この庵の鎰あつかりや蔦蘿　鳴立澤○鴫立てなきものを何よぶこ鳥
首途○けふでばや見ぬ世の族の衣がへ　○此いはり京へしらすな郭公
八橋にて○二度手打澤はとゝきす杜若　○苽屋は稲負鳥のねぐらかな
○寒かれば寒し心のなす所

◎高野百里傳（第六十四）

高野百里名は勝春字は文館雷堂と号す江戸小田原町の魚商なり始め蕉門に遊びしときは茅風と稱せしが後服部嵐雪に從ふて百里と改めり。
百里平野杉風と友としよし當時生玉琴風と名を伸ふせしが三十余年間一日も俳諧に遊ばざることなかりしとぞ其熱心なる想ふべし。
百里家大に富む奢侈を好み食物の調理を善くせり又酒を煖むることに妙を得て終日終夜とも其度を差へざりしとぞ。
寶永の末には不知火を觀んとて筑紫に遊びしが熊本にて俳友と交り其紀行中には秀吟頗る多し。
百里は寛文六年丙午を以て生れ享保十二年丁未五月二日に歿す享年六十有二。

○

人道○うけがたき身を喜べや生身玉　○埋火や聞耳たつるねづみ罠
○一つある家も枯野のへの字かな　○松並に櫛を入れたる須磨の夏
○一柏子ぬけた貞なり衣がへ　修羅道○辻〻に切ちらしたる西瓜かな
○白菊の白すきにけり後の月　○雷の撥のうわさや花八手
○みめかたち女の鬼かかたつむり　○霜朝の顧宜のしはぶき神さびぬ
○けふ菊に仙臺鍋の筧かな　○蛸壺やおのれ蓋にて五月闇
倒島○雲の峰うねり上せよ土用波　○なる神や忽ち青き唐辛子
○しらぬ火やまづ後の世に入る心　○蚊遣火や結びかけたる繩のれん
天道○稲妻のわづかに笑ふ契りかな　○夕立や炊ぐけふりをつれて行く

地獄○落鮎や火振暇なき水の色
○くゝ立や五條あたりの立女
○菅笠や男若弱たる花の山
○鮟鱇は居間へも押て參りけり
眼鬼○子を捨る長者の門や高灯籠
○手繰繩のくるしや賤が芋の売
○蕣や片庇ふる玄關前
辞世○死でをいて涼しき月を見るぞかし

◎小西來山傳（第六十五）

小西來山は和泉の國堺の人之既に長じて攝津の今宮に棲遲す十萬堂又は湛々翁の号あり。幼にして父母をうしない親族の家に養はる常に讀書に耽りて手に卷を釋てず前川由平大に之を奇とし勸めて弟子となせり其敏達なること一を聞て以て十を知るの才わりされば年未二十にならざるに机を立てゝ俳宗となれり蓋し中葉談林の巨擘にして宗因の一派は來山に至りて大成せりと謂ふべし。

來山人となり疎放にして酒を嗜めり或年の除夜に門人某の許より翌元朝の雑煮の具を調して贈り越せしに恰も酒を飲みて下物の盡きたるときなりしかばよき物を得たりとて頓て煮て之を食ひ

我春は宵にしまふてのけよけり

の句を作りてうち興せしとかや。

來山生涯妻を娶らず常に女人形を愛翫して左右を離さざりしことは其記に詳なり文も亦可なれば左に之を掲げん。

西行法師よ銀の猫を給ひけるに門前の童子にうちくれて通りしとかやいはくをあらめ
我は洛にてやきものゝ人形にあい懐にして家よ歸り晝は机上にすゑて眼によろこび夜は枕上に休ませて寐覺の伽とす世を見れば畫本達磨など崇めて科もなき身を白眼つめらるゝよりはるかにましてんや物いはず笑はぬかはりには腹たてず悋氣せず蚤蝨の痛みを覺へねばいつまでも居住ゐを崩さず留守に待らんとの心遣ひなし酒のまぬはこゝろうけれどさもしげにものいはぬはよし白きもの塗ねばはげるとなし四時をなじ衣裳なれども寒暑をしらねば此の方氣のはると更になし夏はむかふにすゞしく撫るにこゝろよく冬は爐のもとを許さねばよいかげんにあたゝかなり女の石になりかたまりしためしを思へば石が女に化すまじきものにもあらず千とせを經とも變ずまじきかたち風

老がなからんあとの若後家さりとも氣遣ひなし男は何國の土工どや出所をしらずあら
うつゝなのいもせものがたりやな
折る事も高根の花や見たばかり

其洒落なること以て觀るべし。

來山は承應三年甲午に生れ享保元年丙申十月三日に歿す享年六十又三其辭世に曰く

來山は生れた所で死ぬるなり
それで恨も何もかもなし

○

○我寐たを首上に見る寂かな
○梅の花名に呼よくて匂ひ哉
○早乙女やよごれぬものは歌ばかり
○重たくと雪付けて來よ若菜賣
○蚊ふすべの中に聲あり念佛講
○時鳥裸て起て橋ふたつ
○春雨や火燵の外へ足を出し
○唐辛子茄子の朱に奪れず
○春の野や長きかづらの裾につく
○手も出さで物荷ひ行枯野哉
○初夜と四つ爭ふ秋になりにけり
○香を持て堀をこさるゝ芽うど哉
○見かへれば寒し日夕の山櫻
○何の木と問ふまでもなし歸花
○むしつてはく捨つ春の草
○雨戸こす秋の姿や灯の狂ひ
○元日やされば野川の水の音
○我春は背にしまふてのけにけり
○千網に入日滿つゝしぐれつゝ

裏夏子

○春の夢氣の違はぬからめしい
○萱草の花と斗や忘れぐさ
○氣に向ぬ時もあるべし節季候
○竹の子を竹になれとて竹の垣
○両方に髭が有なり猫の戀
○涼しさに四つ橋を四つ渡りけり
○花咲て死ともなひが病かな
○ほとゝぎすぬれて帷子一つなり
○松の月枝にかけたりはづしたり
○ぬす人の錢をく雪のやどり哉
○蕣に置とは露のつよみかな
○夏川や草で足ふく時もあり
○飯鮹の可愛やあれて果るげな
○鷺にとはめや梅のかなづかひ

◎千代倉知足傳（第六十六）

千代倉知足は勘左衛門と稱す尾張鳴海驛の人之其居を号して寂照庵又は蝸廬亭といへり。芭蕉翁を師として一家皆悉く風流に遊べり翁嘗て言ふ鳴海は名古屋に近く桑名大垣にも亦遠からざれば時に往來して餘生を送らんとて知足の家に杖をとゞめられしことありしが其家に備使せる小童に習字の手本など書きて與へられ且我舊名は用ふることなしとありて其小童に甚七といふ名を授け其烏帽子親ともなられしとぞ。

知足は晩年に多くの人の發句を集めて編みついらんことを企て專ら其事に從ひしが半途にして病死し志を果すことを得ざりしかば其子蝶羽遺志を繼ぎて遂に其功を奏せり其集を名づけて千鳥掛といふ。

千代倉知足は寛永十六年己卯を以て生れ寶永元年甲申四月十三日に歿す享年六十有六。

○

○花を吹し風かたまりて櫻の實
○五月雨は下へ流れて川もなし
○寐て起て喰てはこする桑子哉
○から風や吹程吹て霜白し
○蜻蛉の顔は大かた目玉かな
○間引菜の露提て來る目籠哉

○手習の師匠へ一把大根引

◎高村和及傳（第六十七）

高村和及は露吸庵と號し直唱法師と稱す京都の人にして晩年洛西壬生村に幽棲せり。始め貞風を慕ひて常長を師とせしが後には蕉翁の風韻を學べり。

和及は正保三年丙戌に生れ元祿五年壬申正月十八日に歿す享年四十四才。

○

○初櫻八重の一重の好みなし
○中わろき人なつかしや秋の暮
○うれしげに寺なぬれつゝ夕時雨
○行ほどに最早山なしほとゝぎす
○人聲に尾のなき秋の夕かな
○都出てもはやかなしき砧かな
○初雪のつゝかば人にわかるべし
○夕千鳥大名船の唄ながれ
○大名の通り過ぎけり秋の松
○朝貞の種子とる人のこゝろかな
○橙や其みそのまゝ二年ごし
○妹が手に鉄槌やさし冬搗
○甘みなき薄に胡蝶哀れなり
○長き夜や來ぬ人によむ鐘の數

○くど〳〵と二日になりぬ衣がへ
○稲妻や二本までよむ小松原
○水の泣聲きく秋の寐ざめ哉
○余の草にたとひをとるとけふの菊

辞世○我としも四十四の花のわげく哉

◎心敬僧都傳（第六十八）

心敬僧都は比叡山住心院住職にある時北野連歌の會に

人を送りてかへる野のすへ
身はいつか煙りの爲にのこるらん

かく附られしを天滿宮御感ありて手に葉の大事立水の卷外涙の卷等を授け給ひしとぞ云ふ

されば後梵灯庵に僧都のはこらを立て煙の宮と云ふ。

もゐてそのふにみどり云ふいろ
とぶ蝶のつばさ計りに風見ゐて
石の上にも世をぞいとへる
亂れ意にわがいき死の有を見て

又太神宮法樂千句に

日のみかげ花に匂へるわした哉

と詠せり。

心敬僧都は生死年月日詳ならず

○

○きのふ見て花か鳥鳴く朝霞
○月にこび月に忘るゝ都かな
○ちる花の音きく程のみやまかな
○柳ちりかりがね寒き夕べかな
○花に見ぬ夕ぐれ深き落葉哉

◎菊岡沾涼傳（第六十九）

菊岡沾涼名は房行藤兵衛と稱す伊賀菊岡の人なり地名を以て氏となす南仙齋又は崔下庵の号あり沾涼は晩年の号にして内藤露沾公（陸奥磐城平の城主）の賜ふ所なり此の時の句に

十分に沾ふ空や夏つくば

と詠吟せりと云ふ。

菊岡沾涼奇性穎達にして和漢の書に渉獵し博識強記通せざる所なし少ふして江戸に遊び芳賀一晶の門に入りて俳諧を學べり。

沾涼は貞享元年甲子に生れ延享四年丁卯十月十四日歿す享年六十又四淺草藪願寺に葬むる。

著書には俳諧綾錦、百花寶、諸國俚人談、日本行程記、江戸砂子、温古志、藻塩袋、奈良土産、日光名跡志等あり。

○

○人の和はすゞあり竹の若ざかり
○明日をかむ氣色を見せて瓢薯草
○もろこしの一里も夏の夜明哉
○驚の漏昭素性はとゝぎす
○野も空に空も野にありけふの月
○初雪ややうゝ土の消るほど
○浮立や花のうろこのしのゝ梅
○十分に沾ふ空や夏つくば

◎泊瀬川傳（第七十）

泊瀬川は越前三國荒町屋の遊女なり俳諧に名高く其吟も又秀でたり。

泊瀬川或時江戸の侯何の某殿一夜此に遊び給ふ事ありきに泊瀬川我身あづまに行き其地の景色を一見せんと思ひ之を願ふ事久しもし時を得て參りなば御屋敷に暫く止め給はらんやといふに心よく請ひき給ひぬ其後主人に身をあがなひ百日のいとまをこひ菅笠に杖に身をやつし江戸につき彼の御屋敷に尋ねければ其の君遙ひ給ひいかなればかゝるさまにて來りしと召るゝに俳諧修行なりとて其由をかたり道の記など見せしかば感じて日を重ねとゞめ給ひ同列の侯にかたりはせ川が遊藝を手すさびさせ諸方よりも給もの數多あり歸るときは衣服種々の餞別馬五疋に負せて送りたりされども其品は皆主人にとらせて其後出村と云ふ所に庵を結び生涯世を安く過せり。

泊瀬川は寛永三年甲寅に生れ享年七十有三にて歿す。

○

○さそふ水わらばゞと螢かな
○瓜紅のしづくに咲くや秋海棠
○たゝひても心のしれぬ西瓜かな
○ゆく水の一夜とまりや薄氷
○目覺しに琴しらべけり春の雨
○とく底のしれぬ寒や海の音
○夕だちやうそのやうなる日の光

◎牡丹花肖柏傳（第七十一）

牡丹花肖柏は具平親王の遠孫にして早く俗塵を出でゝ奇を好めり。肖柏詩を五岳に學び和歌は宗祇を師とす其出る時は必ず牛にのる角に金箔ををく見るものあやしみ笑ふ然れども自若たり始め堺に住みまた攝州池田に居す四時の花を次第に植ゆることを好む故に弄花の名あり又心敬宗祇世を去りてより以來歌會ごとに爭論たゆず文龜二年肖柏敕を奉じて新式今案を述して其法式を定む以後連俳の後輩みなこれによる永正七年の秋帝一夜牡丹花を夢見て藤原實隆卿に命じて肖柏を便殿に召して御連歌あり夢庵と云ふも是よりの名なり。

肖柏八歳の頃とかや獨り机に向ひて習字をせるにある人後より

ものをもいはでものならふひと

と問ひたりしかはたゞちに筆を取りて

くちなしのはなのいろはやうつすらむ

と答へたり其天性の才智知るべし又肖柏性酒を好み又香を愛し花を樂しむ名づけて三の愛と云ふ嘗て六家詠草の華を抽して後柏原帝に獻ずある時牡丹を詠じて曰く

春咲ぬ花のこゝろや深見草

と連俳に牡丹を初夏にいだすは是よりなり

又禁裡御會十五夜に罷り出で

空に置て見ん夜や幾夜秋の月

或人雨乞の歌をのぞみけるとき

空に知るや雨をのぞみの秋の雲

とよめり而して間もなく雨ふり出して田畑を潤せりと云ふ然るに世には其角が雨乞ひの向をのみ賞して肖柏の雨乞の句を云はざるは本意なきの限りなり。

肖柏は大永七年四月四日卒す享年八十有五歳なり。

○

○藤波は薄色　いづれ夏木立

○わすれじな神の昔を梅の花

○滿けらし空は一日に四方の春

○峯や花鳥の醉さく深山哉

○時鳥今日に限りて誰もなし　○この頃は小粒になりぬ五月雨
○降り兼て今宵になりぬ月の雨

◎かしく坊傳（第七十二）

かしく坊は相州の人にて異風の道人なり蹴俳諧をよくしてまた乱舞三味線にいたるまで上達して常に舞ひ調ひて狂ひあるくを業とす。

かしく坊暫く浪華にありといへども久しく富士を見ざるとを不足にれもい街道を小唄うたひて下り駿府法院門前にて富士を見ながら辭世をよみて卒す。

○五戒のこゝろを
殺生戒
いかほどの虫のいのちを綿作り
邪婬戒
狐よぶめ猫にくしやのら心
偸盗戒

殆はじなぬしなき風も椎のから
忘語戒
なりはひのからさ世を知れ春講
飲酒戒
さゝの葉の乱れやすしや雪の暮

◎存義傳（第七十三）

存義は武田家の武士の末にて三浦家に仕へ妹むこに家督をつがせおのれ致仕して隱遁の身となり有無庵と号しその風調一機軸をなせり。

存義嘗て萱場町に住みける頃はごくまづしくして家居もまばらに荒れて雨ふるときは傘さして俳諧したり故に人是を仇名して宗匠のよるの雨は景の一ッなりと笑ひものにせり其後佐内町に居前を移し頗る富みてゆたかに老を養ひたりと云ふ。

存義は生死年月日更に詳ならず

○

○弘法のこゝにも一字山ざくら　○ねぼし着て尻餅つくや小松引
○柴かくれの五日の月や柏もち　○ごしよ柿やおのれが葉さへ落るのに
○逃れながらわざともぬるゝ磯の浪　○四布五つ布みのかくれがのふとん哉

◎木因坊傳（第七十四）

木因坊は美濃の國大垣の人にて蕉翁舊識の俳士にて其氣群を出でかしこければ翁常に賞美されけるとなり。

芭蕉翁嘗て行脚の時木因が家にやどりて

かくれ家や月と菊とに田三反

木因悅ぶ事斜ならず誠に風流の威光なりとて感じて晝夜語りつゝ日を過ぎ終も江戸を旅立て野ざらしを心に思ひ風のはせをの破れも盡ぬ身を觀じて

死にもせぬ旅寐のはてや秋の蔦

と吟じ此前をいづれば木因もをなじ舟にのりてをくりいで

秋のくれゆく先〳〵の笘家哉

萩に寢よふが萩にねようか

と翁は附て立別けり木因口調に

妻にわかれたる人を悼みて

なひ顏はうつらで寒き鏡かな

物の整備せるを

をさ所みなそれ〳〵に草のつゆ

月を詠みて

旅人や泊り合せて不破の月

◎原田宇古傳（第七十五）

原田宇古は大和の國郡山の人なり。

宇古幼より頴悟衆に超へて頗る俳諧を善くせり初め才麿に就さて學びしが後に蕉翁を師として師弟の親み極めて厚く翁の歿後といへども其追慕甚だ深かりしといふ。

宇古は其生死年月日詳ならず

○

○大原女に戀せば梅の花ざかり　○身にしむは櫻さく日の念佛哉
○虫干や臍の緒とかく母の筆　○四季の景月に見に來つ池の岸
○梅のみか老松舞を神の面　○花〳〵の花見ぬ花もなし
○筆の墨しろけて黑しみすの縞　○先がけは花の手柄や宿の梅
○櫻の實山の木の間や身のらくさ　○一むかし數へ拾ふ落葉かな

深川へ尊て○百鳥の跡ひく桃のすばへかな　翁の笑談思ふて○なつかしき竹の時雨や庵の跡
翁の墓に贈で○鳴千鳥をきなの寢覺その聲か　神儒佛○芹の酢に蕗の芽若く酒甘し

◎東々庵蛙井傳　（第七十六）

東々庵蛙井は浪華の產幼少より俳諧を好み奇才の人也若き時遊里にふけりて

折とるな葉へもさわるなさいたづま
家を人に賣りて
雪は水に戻りて今日の暑かな

わびしき庵りに移りて
寒さかな己が一生のはかりずみ
市を放れ行脚に出るとて
野に出て廣き月見ん竹桂
法体せんと友に別をつげ
まろめるや凡夫のあたまぬれ佛
ろの人薙髮を止て夏は蚊のせい冬は寒し心斗出家せよとあれば
尾花とも呼るゝまでの薄かな
流れ渡りに其日を送りて
夕がはや生れた時も丸はだか
寶暦二年の秋
のちに咲く名は是までぞ草の花
此の句を辭世として世を去れり實に風流の道には英傑と云ふべし。

○

○わせ刈て落つき顔や小百姓
○とんぼうやなんの味わる竿の先
○世の中は蠅にとゞかぬ牛の首
○五月雨も染ぬでもなし山つゝじ
○鳩ほどゝ人は言ふ也かんこ鳥
○小鮒には呼れぬものか鰹うり
○日ぐらしや山田を落る水の音
○牛馬をうごかすはへの力かな
○さをとめや子の泣方へ植て行
○くま笹のひ葉うつし餅粽
○蝿の子は産のまゝなるそだちかな
○うの花の麥わらにする垣ね哉

◎宮崎荊口傳（第七十七）

宮崎荊口は美濃の國大垣の藩士なり致仕して俳名を東宇と稱し後に荊口と改む。荊口は蕪門の老手なり其子に此筋、千川の二人あり亦俳諧を善くせり。荊口の生死年月日は詳ならず

○

○白露や我鼻ねぶる牛の舌
○蹄ぬりや簑ふりすゝぐ流れ川
○藪畔や穂麥にとゞく藤の花
○たへ立に麥の中より歸る雁
○七夕や戸障子立る夜半過
○初霜や七夜の朝の樽肴
○梅さくやまたひを虫の朝力
○鳰の巣や螢もかりの足やすめ
○虫の喰ふ夏菜とはしや寺畑
○筏士のうくゐとらゆる濁りかな
○土橋や模にはへたるつくぐし
○鶏の尾につられげり初あらし
○たつ野中の藪や露時雨
○物よわき草の坐とりや春の雨
○夕立に青葉が上の若葉哉
○行春や麓に落す馬糞
○古郷に高い杉あり初時雨
○牛の子の角や待らん年忘れ
○麥秋やうちも蠶の喰ふさかり

◎瀧野瓢水傳（第七十八）

瀧野瓢水は播磨の國加古郡別府村の人親船七艘もてる豪家なれども其身放蕩にしてまづしくなりぬ風流にして異風を好み或年の秋姫路侯瓢水が風雅を聞召し其宅に駕を止め給ふに瓢水行衛知れず御不驚にて歸城し給ふ其のち二三日過て歸るに人々いかなる故かとゝふに

其夜月明かなれば須磨の浦に月見に行きしといふかゝる氣性なれば俳諧は上手也。

ある堂上方へ召れて

けし炭も袖味噌に付て膳の上

母の喪は墓にもうでゝ

さればとて石にふとんも着せられず

達磨のうしろ向の賛に

觀ずれば花も葉もなし山の芋

悟道の句に

有と見てなきは常なり水の月

○

○流るゝや我が抱籠はあらし山　○かゝちりと打火の外は去年のもの

○雛の口飯粒つけて置にけり　○もや〳〵と青み吹出す燒野哉

○使者一人書院へ通る寒かな　○さく〳〵とあられふりこむ霜柱

○滝はて〻鮎くたびれっ水の淀　○初雁や帆柱をこすかゝりぶね

◎稲津祇空傳（第七十九）

稲津祇空は涙速の人なり始め背流と號し學に耽けり詩文を翫び諸國遊歷の心出で〻箱根早雲寺にいたり宗祇の墓の前にて髪をきり入道して祇空と改め奥羽北越に行脚して江戸へ出で深川にかり住居して

寢ぬくまるあいにでそつく紙子哉

梅やしきに行て

梅盛り手を引くほどの碎もなし

女達摩の賛に

そもさんかこなさんかと書して

九年なに苦界十年花ごろも

妙眞寺の大心禪師此句を聞給ひよく禪意に叶へるとて譽られしことあり此の人都に上り深野に住ゐて散雨といひ後涙華より江戸へ來る途中箱根湯本にて歿す辭世あり。

此の世をばぬらりくらりと
死ぬるなり地獄つぶしの極樂の助

祇空は享保十八年四月十二日卒す享年八十又一。

○

○梅が本老も頭巾を忘れけり　○朝寒や盛り丼べたる飯の湯氣
○猿に社長い夜はあれけふの月　○なつ痩やみぬ唐士の貴妃が事
○重さうに小僧の提し牡丹かな

◎馬淵宗畔傳（第八十）

馬淵宗畔は初め重治と稱して京師に住せり。宗畔夙に風雅を好みて松永貞德を師とせり當時俳諧の點料は沈香一両を常とせるが宗畔其師に勵めて銀一両と改めしむ然るに野々口立圃も亦其例を追て銀一両を納めしかば宗畔また再び師に向ていへるやう立圃すら猶斯のことし更に一錢を增すべしとて遂に點料は銀五錢と定まれりとぞ。

宗畔は承應四年甲午の春湯浴中卒倒して竟に歿せり享年詳ならず。

○

○花鳥の春の名殘や鳴ねいり　○聲なくてはへ飛かゝるいなご哉
○吹わへる花や春風初利天　○染つけて花野やうつす桔梗哉
○年の緒をつくやかゝみの餅そくい　○尾をはねてなかば其名や鶯ん
○七賢が植けん花ぞ數つばき　○夕立は雲のはきれのこぼれ哉
○山よりもにはてるや猩紅葉酣　○散のころ木末は秋のはてばかな
子のとし○あけてけふしをこゝろねのとしみ哉　○根なはりそさかぬはうごろもちつゝし
○あす雲になるやしるこの望月哉　○松茸の句ひを嗅のひとき哉
○めいてしもみればのだちのづばな哉

◎乾貞恕傳（第八十二）

乾貞恕は越前の國敦賀の者にて重次といひ江州大津に住み貞室の門人となる。貞恕又浪速の梅翁の檀林にたづねて

待またず人ゑらみせよ時鳥
いづれの里もおなじ卯の花

と宗因附たり又或時のつけ合に

遠くはゆかじ今朝の落人

といふ句に貞恕

遣ばたにいきり立たる馬の屋

と附てより仇名を大津の馬のくそと呼れ逢坂山に俳諧をかまへ數十人の俗俳を集め諸國行脚を呼びよせ接待しける其ころ貞室の門人多しと雖あとをゆづるべき人なし然るに此の人得たる所ありと花の本をもづり與へられしこと風雅の本望とこそいふべけれかし。

貞鳥や深山あらしをさそふ辭

貞恕は元錄十五年三月四日卒す享年七十歳上鳥羽實相寺に葬むる。

◎田代松意傳（第八十三）

田代松意は江戸の神田の人なり宗因を招きて友と斗ひて始て江戸談林を立て飛鉢と号しその口調變化の餘情流行の体を説きて諸人をはげまし俳諧書數多を著し談林風韻をはじめ一字の働き一句の情こまやかに教へられければ世間皆談林風せぬ人すくなし。

さればけ髪に談林の木あり梅の花　宗因

世俗ねぶりをさます鶯　雪紫

朝餉たばこの煙りよこたれて　在色

駕籠かきとはる路の山風　一族

詠むれば供籠つゝく峯の雲　正友

此ごろ江戸に此談林風をひろめたるは此松意と伊勢の正友と二人して力をあはせ諸人に道をさとし東れの功を得たり正友も雅情強く名を得し句あり。

入相の鐘きゝつけぬ花もかな

槙林軒松意は其生死年月日詳ならず。

○

○雪折やむかしにかへる笠のはね

○發虫のいつから見るや歸り花

○涼しさや竹握り行く歓ったひ　○百尓り蓄も持つて翁草
○粗相なる膳は出されぬ牡丹哉　○時鳥聞に出しかいさに留守
○吹寄て月となりけり芋の露

◎山岡元隣傳（第八十三）

山岡元隣は花洛の匠家にて俳諧を季吟の門に入り和學に明るくして徒然草鉄槌増補を著し長明方丈記頭書など書き俳書を數多上梓して博聞强記の人なり中にも寶蔵といふふみ詩歌を以て調度の數文を作り雅にして其名高し。

傘

天にはるかしかさもがな花の雨
あびす大こく
金持や獨匠白し月と花

紙

ちは文やことばの花の花畑

十露盤

算用はしらぬかはなど老の數
たらひ
月のかはあらふ盥かそらの海

持佛

終に行く道づれなれやくだり月

山岡元隣は行年八十又三にて卒す。

○

○露を添乳花をまくらの胡蝶哉　○野は露の花一色にあけにけり
○つくゝと繪を見る秋の扇かな　○なたまめや蓮生坊が庵の垣
○鈴虫やふり出す草の蔵さより　○未た道は一つに成て尾花ふく

◎櫻井吏登傳（第八十四）

櫻井吏登は江戸の人なり初め李嗣と稱し後に人左又は班象ともいへり。

吏登其師嵐雪歿するに臨み其の點高弟清水周竹に投けしも周竹は其の身已に老たりとて之を吏登に譲れり因りて吏登は雪中庵二世と稱し一時は嵐雪の名をも冐せしが幾ばくもなくして吏登に復せり。

吏登晩年に至りて深川に卜居せしが僅に二疊敷の小舍に薪を積み案を置きて其中に住し殆んど跡を容るゝ餘地なきも晏如として清貧を樂み風雅の外には更に心を寄す所なかりしとかや

吏登は寶暦四年甲戌六月十二日に歿す享年詳ならず。

○

○名月や桔梗かるかや女郎花
○氷仙は咲ても似たる人はなし
○冬來なば我とさて寢よきりぐす
○をく霜やたま〳〵鹿の足の跡
○明にけり皆初春になりにけり
○此の中に翌元日ぞをかしけれ
○いつの間に來て居ることぞ小田の鴈
○また來よ例の齒ぬけの鉢叩
○大竹や人は眠たき五六月
○老が秋明六つを聞くをもしろさ
○夕立に下りてもゆかず牛の至
○凩やあとさき見ぬ草の原
○一筋もわだにはたれぬ柳かな
○爐開きや櫻くれたる古手紙
○粥ずゝる夜べになりけり鹿の聲
○鶴よりは鶯に乘ちん年の暮
○秋の風蘇鐵は肩へかゝりけり

◎半井卜養傳（第八十五）

半井卜養は泉州堺の產にて牡丹花肖柏の末なり。

始俳諧に遊ひて慶友と號し醫業を能くして名高かりし依て人皆な尊敬す堺北の庄にありし頃いにしへ遊女地獄の住し高須といふも爰なれば卜養狂歌に

南北のみな島どもがとらるゝは
たゞ一もつのたかすなりけり

又住よしに詣でゝ

すみよしの木の間の月の片われは
ありけるものを爰にそりはし

卜養晩年に至り台命によりて東都に召れ官録を賜りて鐵炮洲に屋敷地を拜領すされば狂歌に

卜養は本道どこそ思ひしに
うみ地をとるは外科にこそあれ

卜養又和學に頗る通じて歌俳諧ともに即吟に妙あれば口柏寸卜養と人々唱へり其後法眼にまで昇進して其名を博せり。

卜養は延寶七年七十七歳にて歿す。

○

○朝倉やこのまるつぶの青山椒　○是でこそ命もつゞけ夕すゞみ
○草取の空に息つく青田哉　○植捨し山は青しかんこどり
○山鳩の聲の眠さよ若葉ごろ　○此の家にこれはと思ふ牡丹かな
○あつらへの天氣なりけり花曇　○春雨や猶も植たし寢てもよし

（第八十六）

◎里村昌琢傳

里村昌琢は連歌に名高くしてしばらく雲上へも召れし人なり。

昌琢或會に臨みて

風もにくまず雨もうらみず

とこしなへちらぬ花こそめでたけれ

と附たりければ或人難じてこれはふしぎなり何れの花のとなりやといふに昌琢答へて貴方の詠と我詠も同じとなれど見所違ひあり只人目前の花斗り見てゐるゆゑ散やすし我は只ことばの花を見る故にあらず心の花ことばの花いづれも古歌に例ありいにしへの前句に

をしめどもちるもみぢなりけり
いつも見る心の花にともないて

と宗祇の附たるとありといひければとがめし人閉口す實に昌琢は雅才の勝れし人と云ふべし。

○

○船呼べばたゝ川霞の答へかな　○寺町のとなりも遠しなつ木立

○桑の實に片づまそむる痕かな
○天の川東へながれ白みけり
○行秋につれだつ虫の遠音かな
○桐の實の吹れ〳〵て初しぐれ
○桶あて〻置て留守なり苔清水
○はつ嵐瓜番の家あれにけり
○重箱にわられたばしる亥子哉

◎巽雨青傳（第八十七）

雨青は浪速の者にて巽何某と云ふ富たる者なりしが驕奢甚だしく財を投げて放蕩なせしが故ありてあづまへ召さるゝとあり其道中にて人群れつどひてのゝしるものありしかば

笑ふもの笑われて見よはなの旅

其後雨青事はてゝ浪花に歸りてけるが産業も減じて貧しくなりたれども遊學には散財してうかれあるき顧みる所なし

傾城に買れて見たき袋哉

雨青かくて古今にも住みうく京に移りても驕奢の心とめがたく衣服とも美を好み導引按服をするにも物かげにて妾に琴をひかするを常とせりれうぢは心靜かになすべき事といへり、之は唐土にて蘇合樂を吹く間にねる樂を号て蘇合圓といへる故事より思ひよれるよしゝ。巽雨青は生死年月日詳ならず。

○

○一雨に旗をわげたる螢かな
○冬柑やむかれ〳〵しゝゆろの皮
○木からしやある夜蜜に雪の花
○母人のふりそで見たり土用干
○かしひとり置て鴫立夕かな
○松のみと思ひし山に初もみぢ
○淋さの奥聞んより初時雨
○片路は日のくれになる枯野哉
○沖なまず涼しや風もしをかげん
○涼しさや風待舟の帆ごしらへ
○笠ぬけて面目もなし鳥をどし
○白魚はあへかなる身を汐の海

◎里村紹巴傳（第八十八）

里村紹巴本性松井氏臨江齋或は平醒子と号す南都の人なり。

里村紹巴の幼にして興福寺中明應院（一本明星院に作る）に唱食す性偉異にして碌々たるを好ます常に謂へらくたとひ賤業たりとも必らず名を天下になすべしと時宗の僧周桂南都

に來れり紹巴之につきて連歌を學び次で之に從ひて平安にのぼるこの後大に連歌に名あり臨江齋の名は三條西將名院殿の給へる所なりと云ふ紹巴明智光秀の亂に陽光院宮を扶け奉りて其賞として法印の位を賜りしも辭して受けず曰く危を見て節をなすもとよりのこと豈に報賞にあづからんやと其心中の清潔なるおもふべしこゝに於て法橋に叙せらる豊太閤の時に至りて大に寵遇を蒙り宅を大炊御門堀川の東南に賜はる此の頃連歌に名高かりしもの七人世人之れを連歌の七士と云ふ紹巴も又其中の一人なり其後秀次の師たるを以て疑を蒙り三井寺に謫せらる此の寺に蟄居の時貞徳翁の訪ひ來ることあり終日胸襟を開きて相談し別にのぞみて貞徳翁

しかの湖やよせさて氷るさゝ波も

春まはやがてたちぞかへらん

と詠じたりしに其翌年の春赦免せられて歸洛す三井寺にあること三年なり慶長五年に及びて歿す大德寺中正更院に墓あり子、玄仍、玄沖、皆ともに連歌に有名なり。

○

○梅の花香ながら寫す筆も哉

○涼しさや旅へ出る日のあさぼらけ

○都にも松風ふいて夜寒かな

○すつ汐の貝のとりつく門柱

○書院にも機をたてけり虫の聲

○名を聞てまた見直すや草の花

○小川にもならで流るゝ清水かな

○染出しを人には見せぬ紅葉哉

○來た道は一つに成て尾花なく

○木枕にはなかみあつる夜寒哉

○明月や虫一つところ夜もすがら

◎三國野風傳（第八十九）

三國野風は越前の國三國の遊女にして容儀勝れて才智あり風雅の道にも心ざし深く風儀氣高し野風或時浪速より富たる遊客此里へ來り野風をあげ藝子其外大勢を伴ひ花見に行きけるが此の客亦文雅ある人にて詩を作り歌を詠み手跡を自して扇にかき花の枝に下げ人々の無雜を嘲り野風の歌よまぬをさみし我顏なるを見て野風筆をとりて

風いとふ花に扇の無粹かな

と短冊につけゆるし給われと立ち歸りけり其後彼客猶通ひ來れどことばりいふて出す人々

いさめて身の爲ともなるべき客なるに出給はぬは如何なる事かと問ふ人ありければ

振り出しばかりそめごとのさつき雨

此答も其氣情をあらはして正しき事を皆人はめけりとなむ。

野風は生死年月日詳ならず。

○

○來てのぞくひよどりにくし寒椿　○朝かはや朝寢の主人持ながら

○つめつては心のしれぬ西瓜かな　○川狩や一日ならふあまのはざ

○涼しさを忘れて戻る川邊かな

◎越の二川傳（第九十）

二川は越中富山の産にて世々大守に仕て武道に心掛深き人なり。

二川後に至り蕉門の俳に遊びて風雅に富めり

琵琶〳〵と松風吹やぴはのはな

夕ぐれをなきのこしてや蟬の聲

二川或時都にのぼらんとを思ひ又江湖に俳友をも問はんと心を決し隱居の願ひを出すに更に許し給はず却て加恩を給はりひそかに止め給はん斗ひありとても此儘にては浪身のこと思ひ遣らずと自ら髮をそりて入道となり家を立ちさるとて

米くれる人には逃て花にとり

此の句を障子に書きのこし立ち出たり大守ます〳〵其こゝろざしをとげしめ咎めなく猶したひて祿は其のまゝ給はり召仕はる老後富山の片山里に庵を結びて生涯閑靜に世を過させしとなん。

二川享保八十有九にて寂す。

○

○手枕のひぢ寒くなし窓の梅　○山吹になにをいらつて蜂の聲

○陽炎や横に干たる酒の樽　○花の雪降らずやうその琴の音

○かけろふに土の匂ひや車みち　○芹摘むや向ひへ廻る鶴のあと

○蛤や北へかたつく海のおと

◎高尾傳（第九十一）

三浦屋高尾は歌俳ともに名人にて全盛なるは人の知る所なり。

高尾畵を又よくし藤の畵の自畵自讃のさかづきあり

をなさけをくみかはす藤の裏葉哉

其頃の客此の盃を見て盃ひらきの酒盛せんと美酒佳肴をもうけ高尾盃を客にさす客をさへたりと返しけるに高尾此の盃のあひは京島原の吉野大夫へたのみたしといへば面白しとて尾清といふ茶屋に京の吉野かたへ持せやりしよ吉野も全盛なれば今一度あらためてもとをし返す故手元改のあひを大坂新町の高窓太夫に賴んと尾清大坂へ持行き高窓賴んで江戸へ下し高尾呑んで京へ遣はし吉野呑で又江戸に下し夫より高尾呑んで客にさす此の盃を都かへりと云ふ或時彼の客伏猪の畵をかきて高尾に贊せよとあれば心にすまぬ客とをもひ

ゐのしゝにだかれて寐たり萩の花

高尾は生死年月日も詳ならず

○

○君は今駒があたり時鳥

○湖もはそきわたりやしゝみとり

○申してもくもさて五月雨

○色〳〵に染なす糸の顧ひかな

◎田中常矩傳（第九十二）

田中常矩名は忠俊通稱は甚兵衛剃髮して眞齋と稱す京都の人なり。

常矩始め片桐貞保の門に入りて俳諧を學ひしが後には其風調を變じて自ら一派を立つ當時京都に於て談林を唱ふるものは大抵常矩の派に屬せりと云ふ或時五百韵の卷頭に

蛇の助が恨の鐘や花のくれ

の句を吟しければ世人稱して蛇之助常矩と云ふ。

常矩享年八十二にて歿す。

○梅の花後家が軒塲の東風ふかば

○はなれがたし星に七夕牛に繩

○花ありて犬のそだゝぬ里もなし

○世の中よ耳こそなけれ鹿のこゑ

○收柱を畑のけづるタかな

○禪寺の花○花いかに狗子の佛性樽の暮

○入相の躑に花を見せしよな

○逢萊や高千穗の嶽よねの山

○梶葉賣聲に天下のやもめ露けき秋也　○やよ根芋世は子ありての親祭
○月夜よし酒屋芋賣須摩明石　御影供○大師葉や辨當閉て入にけり
○馬子やとさ飛脚や遲き橋の霜　○なれとも又秋は夕ぐれ七芝居
○常の日の暮さへうさに年のくれ　○蛸足の箸捨松や藤の畫
○姫瓜に三十の林檎顔色なし　○星の牛和歌の六くさを飼にけり
○松茸や波こす柚酢をしぼりつゝ　○棒鱈は雪あらざるに何の鼠ぞ
鳴瀧人の山莊○岩根筋蟻の枝折や若葉垣　○かい敷の青葉になりぬ花の鐘
宇治妻追悼○扨も夢蚊やひろた成世之けり　○太箸や民のさきぐさ二葉とも
○尊かる嵐のをとや神送り　○こま犬や膝も直さず神のるす
○しみ〳〵と餅腐寒さゐの子哉

◎岡田將監傳（第九十三）

岡田將監は美濃の國大垣の士なり。將監左文右武の聞へ高く常に和歌を好み其上筆道をみがき古人の詞意を机上にならべ和漢の珠を拾ひその光りをあらためん人も知り世にもうとふ斗りの能筆なり。將監或る時の夏都にのぼり近衛殿へ御見舞に出ければ

五月雨によくこそきたねみのゝもの

とあそばしければ將監

あのへこのへをさがす鵜遣ひ

と脇をつけて申上げゝればこゝの外御意に叶ひ御硯御たき物など給りをもひがけなき幸ひに逢ひ譽をとりしは風雅の德なりけり又行脚を泊て世の雜談を聞く俳諧猶吟に

爪紙をさすや楓の初紅葉
尾花の風になり袖のには

月夜には踊れと人を催して

將監の生死年月日は詳ならず。

○

○としよれば月見い友や宿の妻
○老僧の杖で砂かく松のつゆ

○長生の蝶々とまれ菊の花
○來て見れば下葉は青し初紅葉
○朝夕に見る子見たがる躍かな
○燈籠に夜のにしきの小路哉
○來た道は一つになつて尾花ふく
○草うりよそれが重いか萩の露
○踊るべき程には酔てほんの月
○夏痩やともしび遠く眺めける

◎高島玄扎傳（第九十四）

高島玄扎は伊勢國山田より出で醫師を業とし俳諧は貞徳の門に入り後一派をなす。性質かたいぢにして世辭に疎しもつぱらいひかけの言葉を好み德元慶友など同時の人と。探幽が富士の讃に

名を得しやさながら富士を雪寫し

四十二歳の春

守り給へことしはやくし十二神
香のあらば水くさからん雪の花

或時をこりをわずらいさらに藥の驗もなかりしが病床に爲て獨吟百句に

卯の花のをちるは風のれこり哉
いさ黒燒よせんはとゝぎす
○聲に皆泣きしまふてや蟬のから
○聞居れば叩くともなき水鷄かな

此吟其身の祈禱となりにしにやをこり忽ち落て病苦をのがれしは風流の一德いちじるしとてその頃の人々擧て此の沙汰せしといふ。玄扎は其生死年月日詳ならず。

○

○咲花のかはゞ目出度ものはなし
○眠れども扇は捨ぬ暑さかな
○矢の下に母の乳を飲む鹿子哉

◎大高子葉傳（第九十五）

大高子葉は赤穗四拾七義士の一人なり名を忠雄といふ通稱は大高源吾なり。子葉始め俳諧を沾德に學び顏る巧なり國己に亡ぶるや大に復讐の念あり奮然義に赴かんとす母之に告げて曰く上先君に負くなく下祖先を辱しむるなかれと忠雄感涙數行して京都に

至り次で江戸に出づ其後辛苦辛酸終に亡君の爲めに仇を報ずるに至れり其事を擧くる數日前母に書を貽りて永訣を告ぐ文辭悲哀にして一讀流涙に堪へず今左に掲ぐ。

私事江戸へ下り候存念兼て御物語申上候通一すぢに御殿樣御憤りを散じ奉り御家の恥辱をすゝぎ申度一筋にて御座候且は侍の道をも立忠の爲め命をすて先祖の名をわらはし申にて御座候勿論大勢の御家來よて御座候へば如何程く御厚恩の侍も御座候處にさしての御懇意にも遊し不被下人みなの私儀に御座候へば此節たいていに忠をも存じながらへ候て御そもじ樣御存命の間は御養育仕罷在度候ても世のそしり有間敷我等にて御座候得共なまじひに御側近く御奉行相勤御尊顔を拜し奉り候朝暮の儀今以片時も忘れ奉らず誠に大切なる御身を捨させられわすれがたき御家をもほしめしはなたれ候て御うつふんをとげられ候はんと思召つめられ候御相手を打そんじあまつさへ淺間敷御生害をとげられ候段御遺の靈さとは申ながら無念至極乍恐其の時の御心底をし斗奉り候へば骨髓にとはり候てつかの間もやすき心も無御座候されども御短慮にて時節と申所と申ひとかたならぬ御不調法故天下の御憤り深く御仕置被仰付候事に御座候へば力及び申さぬ事全く天下に御恨み可申上樣無御座候儀にて候ゆゑ御城しさひなくさし上申たる事に御座候是天下へ奉對候ていさぎよくはりを保申さぬ故にて御座候しかしながら殿樣御亂心とも無御座上野分殿へ意趣御座候故にて御切付被成たる事にて候故其人はまさしく敵にて候主人の命も捨てさせられたる候程の御憤り御座候敵を安穩に差置可申樣昔よりもろこし我朝共に武士の道にわらぬ事にて候夫故早速敵方へとりかゝり可申所大學樣御閉喪にて候へば御免被成候時分もしや殿樣御跡を少にても被仰付上野介殿方へも何とも品もつさ候て大學樣御外聞も能く世間遊し候樣に被成殿樣にも右の通りに御座候得共御家は殘り申事にて候然ば我々は出家沙門となり又は自害候ても憤を休め候半も此節迄口惜さ月日を送り候所に其甲斐なく安藝の國へ御座なされ御閉門御ゆるしと申名斗にて御座なされ尤も年月過ぎ候て何とぞ御代に出させられ候事もあるべく候はんのよし左樣に御座候ても此節にて殿樣御跡は絶へ申たる事にて御座候へば此上前後を見合申は慮病の仕る所武士の本意ならぬ事にて御座候此上にも天下へ御訴訟申上何卒相手向へ御手當もくだり大學樣をも世間廣く御取立被遊候樣に一命

にかけて御歎願申上是非御取上無御座候はゞ其時相手方へとりかけ可申よししきりに相談の衆も御座候尤も一理は御座候得共左樣の徒黨がましき事可仕道理にもあらず其上御願申上御取上無御座に付相手方へとりかゝり候段はひとへに天下に御恨み申上候にひとしく御座候然ば以ての外の儀大學樣御初め御一門の方々樣まで御爲よろしからぬ事故殿樣御憤を晴らし奉り候より外の心無御座候段々右申越し候ごとく武士の道を立て候て御主の讎をむくゐ申までにてまつたく天下に對し奉り御恨申上候にては無御座然れども思召御座候はゞ天下へ御恨申上たるも同然とて我々迄もの親妻子に御崇り御座候ても力及び申さぬ事にて候まゝ萬一左樣の事に相成候はゞ兼ての通りに何分にも上よりの御下知の通りに尋常に御覺悟可被成候御はやまり候て御身を我と御あやまち被成候事など呉々もあるまじき御事に候まゝ必ず〳〵左樣に御心得なさるべく候世の常の女の如く彼是と御なげきの色見ゑさせられず愚にをはしまし候はゞいか斗り氣の毒にて心もひかれ候はんに左はなくさずが常々の御覺悟程御座被成候て思召切りかつてけなげなる御すゝめにもあづかり候御事扨々今生の仕合未來の悅び何事か是に過

申候はんや天晴れわれ〳〵兄弟は侍の名利に叶ひ申たる儀と不淺ぬ大望に奉存候先きにての首尾のほど御心にかけられまじく候私三十一歳幸右衞門二十七歳九十郎二十三歳何れも〳〵くつきやうの者共にて容易く大望をとげ亡君の御心をやすめ奉りみちいの「ろんま」の金札のみやげにそなへ可申まゝ御心やすくをぼしめしたゞ〳〵御息才にて何事も時節御待可被成候御よはひもいとふ御かたむき被成候といく程も有まじき御身に嘸々御心細く思召されたよりもわらぬ方にとぼしく月日を御しのぎ遊し候はんと存奉り候へばいか斗り心うく存候得共其段力及び不申候時に望み候ては主命をそむき父母をかたにかけて如何なる山の奥野の末にも隱れ又は主君の爲めに父母の命をも失ひ申事義と申物のやみがたき故にて御座候之等の道理くらからぬそもじ樣にてはをはしまし候得共筆にまかせ申殘し候九十郎御母公もより〳〵は仰きかされ候て必々をろかにかなしみ申さぬ樣にかたみに御力を添へられ幸ひかな御法体の御身にて候得ば此後いよ〳〵以て佛の御つとめのみにてうさもつらさも御まぎれまし〳〵みちいの事朝暮御忘なく世もをだやかに成候はゞ寺へも節々御參り遊し候はゞひとつは御身の養

生にも也申候まゝ姥へもあきらめ候樣によく〳〵被仰可被下候かしく

元祿十五年九月五日　大高源吾

御母上樣

又復讎の晩師の方へ送れる書あり

其後は彼是御無音に皆本意候何も樣御堅固に被成御座候や年來御懇意に被成候故一通り相傳へ申候扨は拙者事所存の筋難默止今曉は存立申候趣に御座候御厚情彼是以生々世々に及候事に御座候

山を裂く力も折て松の雪

猶〳〵春帆竹平も同じ道にて候消泉は御存の如にて候御恩借の蒲團申受候て其まゝ打捨世申候一句御引導奉願候

十二月十五日　沾德先師へ　子葉

復讎の明年春合觀堂にて追悼會ありしとき

なき跡も猶梅のめうどかな　沾德

鶯に此辛子酢は泪かな　其角

枝葉まで名殘の霜の光かな　沾洲

其骨の名は空に在る雲雀かな　貞佐

等の追愁の句ありたりとなん。

大高子葉は元祿十六年享年三十二歳にて忠死す高輪萬松山泉岳寺に葬す。

○

○日にやけていざ笑はれふ山櫻　○初かつほ江戸の芥子は四季の汗

○短尺に荻大名や句談合　○いかされて白根が嶽を行へかな

○源氏畫の疊の形や草のもち　○ぼた〳〵と落る椿のおぼろ月

○春の野を只一呑みやきじの聲　○なんのそのいはをも通す桑の弓

◎富森春帆傳（第九十六）

富林春帆は富林助右衛門と號し赤穗四十七士の一人なり。

春帆涙人の後大津の伯父の方に居て母に仕へて孝なり國士と東國へ下る折から母にいとま

を告げるに母も悟りしるといへども色に出さずしてしばしの別れなれば老の身は定めなしと小袖一つ出しこれは吾がたしなみなれど寒さときなれば之を着て行くべしと樊噲のふるごとなど物語していさめの言葉を云ひ別れてのち母は自殺す。

富林春帆猶心を鐵石にかため主親の敵と討入には別して勇猛をあらはし其後御預けとなりても身をつゝしみ翌年二月四日切腹致すべき旨仰わたされけるにありがたしくと感涙を流し幸ひ四日は姉の忌日なればと悦びて

先だちし人もありけり今の日を
ついの旅路の思ひ出にして

此の句を殘して相はてたり。

巻帆は元祿十六年二月切腹す享年三十四歳なり高輪萬松山泉岳寺に葬す。

○

○冬鴨の身はむしらるゝ行衛かな　○上みれば限りなしとや百合の花
○夕立や人にもくれず海の上　○夕顔に馬の顔出す軒ばかな

○此の次ぱくと思ふ花火かな

◎澤露川傳（第九十七）

澤露川は伊賀の商賈某の子なり長じて後に尾張名古屋に住し藤屋市郎兵衛と稱し月空又は月窓の別號あり。

露川夙に俳諧を嗜みて蕉門の耆宿なり時人稱して金澤に北枝あり名古屋露川ありといひしとかや。

蕉翁の歿後に私見を立て異說を唱へしがば支考文を寄せて之れを詰責せり名づけて露川責と云ふ然るに露川も亦答書を作りて其嘲りを解けりこれを合楔と稱す。

露川寛保三年に歿す壽詳ならず。

○

○さびしさの腸赤し唐辛子　○そやされて咲ぬ梢も木の芽かな
○蟬なくや踝でこける ぬくい板　○草の葉に出てなけ壁の蚤
○年の尾をふみちぎられな葉竹賣　○名聞を襟に殘して紙こかな

○時鳥雲蹈はづし〳〵
○買て行塗長持や稲の花
○雷をしづめてたゝく水鶏かな
○來年は〳〵とて暮にけり
○吹上ぐる空に木葉や初送り
○草苅の道〳〵こぼす野菊かな
○有てなき角をもしろや蝸牛
○忘れずにゐてや梢の歸り花
塗籠
○奥底もなくて冬木の梢かな
○夜あらしに中でかたまる霰かな
○分別をなれて海の月夜かな
○梧の火や煖になくきり〴〵す

◎猩々庵傳（第九十八）

○梅がゝの入りわたりてや朧月
○梟の聲不性さよをぼろ月
○脇ひらも見ずに咲たる桔梗哉
○梅が香に智恵計られて初音哉
○出そろふや稲の田づらのさんさ降
○わたましや先へ來てゐるきり〴〵す
○煤萱の中から白し水仙花
○翡翠や羽を粧なて水かゝみ
○行く〳〵子なくや艪の音馬の鈴
○冬籠り蚊張の釣手の團かな
○はせをばや在家の中の淨土寺
○生海鼠哉夜が明たやら寝たやら

猩々庵は伊賀の國の人にて其角の門人となり京都に住せり。猩々庵夙に俳諧を嗜みて文雅の聞へあり

うしろ向の達摩の賛に

こちらむけ酒がいやなら寒の餅

布袋の僧に

小袋に大千入れて花ごゝろ

此の句を黄檗の學芝和尚見給ひ之ではいまだたらず我ならば

祇ぬけの袋に實あり芥子の花

とすべしとしめされしかば敎へかたじけなしと謝し其後しゆ〳〵法の意味をとひ生死の理をきけば和尚答て

あるなしはのがれぬ物ぞ諸人よ
きのふの夢が今日もさめねば

猩々庵かへし

ゆめに死しゆめに生るゝ朝寐時
さめて苦をする釋迦よりはこし

更に慾なくある者を皆非人に施し景色をながめて
氣がむけば杖にはねあり庵の春

此の句を吐て死去す。

猩々庵は享年七十又八にて歿す。

○

○行水につなぐは何處の蔦かづら
○雪降て草木の姿變りけり
○初秋の朝空うつる流れかな
○秋の夜や下かはらけの油さす
○つく人はさゞ寒からん鐘の聲
○駿河路や田の浦邊の朝がすみ
○旅人の路踏み迷ふ花野かな
○歳月は人待たずとや散る櫻
○また重ひ袖となりけり衣がへ

◎推本才麿傳（第九十九）

推本才麿は少文大坂の人（一説に南都の人とも云ふ）なり初め山本西武に學びて則武と稱し中ごろ井原西鶴を師として西丸又は西麿といひ後西山宗因の門に入り才麿と更む狂六堂、舊德翁、松笠軒、甘庵泉、等の別号あり。

才麿或年江戸に來りて
身の隱家に山を買けり

といふ附句をなしたりしを時の俳家沾州竊かにこれを難せりと聞き俳宗にして買山の故事を知らず江戸の俳諧者恐るゝに足らずといひて其年の暮に又
富士はわが買ふて置けり年の暮

の句を詠みけり沾州はこれを傳へ聞き己の非を覺りて
兎や角の年はづかしや暮の富士

と吟じたりとかやなむ。

才麿は明暦二年乙未に生れ元文二年己巳正月二日に歿す享年八十有二大阪西寺町萬福寺に葬す。

○

○怠らで咲て上りし葵かな
○夕ぐれのものうき雲や鳳巾
○時雨ふり黒木になるは何〳〵ぞ
○水につれて流るゝやうな燕かな
○景清もあされし蛋の行衛哉
○花の木も物の見事な冬木哉
○秋の暮男はなかぬ者なればこそ
○若鮎は鵜の一嘴にたらぬなり
○蕣はすこしの間にて美しや
○梅が香にふけ行笛や御曹子
○思ひ出て物なつかしき柳かな
○時鳥新茶よりこき聲のいろ

◎僧李由傳（第百）

僧李由字は買年亮隅上人と稱す近江平田光明遍照寺十四世の主にして律師に任す越智性にして伊豫河野氏の流裔なり。

李由常に點茶に耽り庭に四株の梅樹を植て自ら四梅廬と號せり。

李由夙に蕉翁の風雅を慕ひ其門に遊ばんことを冀へども輙く其志を遂ぐることを得ずしてうち過ぎしが一日法用に托して旅裝を整ひ翁の草庵を訪ひ相見る事を得てより師弟の契り深く後年翁が幻住庵に客居の時には屢々往きて俳事を問ひ又常に許六支考と相交りて益を得る所多かりしとぞ。

李由は寛文元年辛丑に生れ寶永二年乙酉六月二十二日に寂す享年四十有五。

○

○明月は蕎麥の花にて明にけり
○稻むしろ近江の國の廣さかな
○乞食のことといふて寢る夜の雪
○草刈にそれか重いか萩の露
○夕立やひし〳〵とやむ鳥の聲
○水鳥の寢あたゝまるか靜なり
○水湖を吹きつゝ行ふゞきかな
○黑さもの一つは空のひばりかな
○菜の花を身うちに付てなく蛙
○春近き三年味噌の名殘かな
○行春に飽くや干鱈のむしり物
○胡金のむすび合すや長野堅田
○澤山に吹葷祭のをこし炭
○食物をしゐるも花のゐるじかな
○出代や猫から先へ馴そむる
○蚊の聲の中にいざかふ夫婦哉
○朝寢して出れは小春の天氣哉
○袴着ぬ聟入もあり年のくれ
○生壁に袖をきつかふ夜寒かな
○始の姿は見ゑず稻すゝめ

○麥蕎の土に落つく時雨かな
○蓮にのる蛙は似たる空也哉
○煤掃やねろりにくばる唐辛子
○裏屏を引つる松のあらしかな
○いつの時人に落けん白牡丹
○いひさかく人うらやまし蟋蟀
○鎌さりや裾拂ふ手にすがり付
○初夢や波を枕の青たゝみ
○寐てゐても世はなり〳〵や長凱
○松明の焚捨も有まんじゆさけ
○口元にわる名ぞわれは草の花
○川がりや藪かなぐりし跡も有
○下萌のけしきをけすや春の雪
○秋の野を遊びぼうけし蕎かな
○小若衆に念じさわまる巨燈哉
○鰐舟や比良より北は雪げしき
○家根まくる野分の後や虫の聲
○はた織やまとゐに蜘の糸仕事
○刈後や張合なしに飛ぶいなご
○草蘆よそれか重いか秋の露
○なたまめや蓮生坊が庵の垣
○萩の葉や青い内からかれし音
○川狩やいせ武者一人赤ふとし
○柴の戸に鞦韆くはなの夕べ哉

明治三十年十二月五日印刷
明治三十年十二月十二日發行

正價金貳拾八錢

著作者　竹の屋世外主人　武谷紀之
筑後國三井郡大城村八百二十二番地

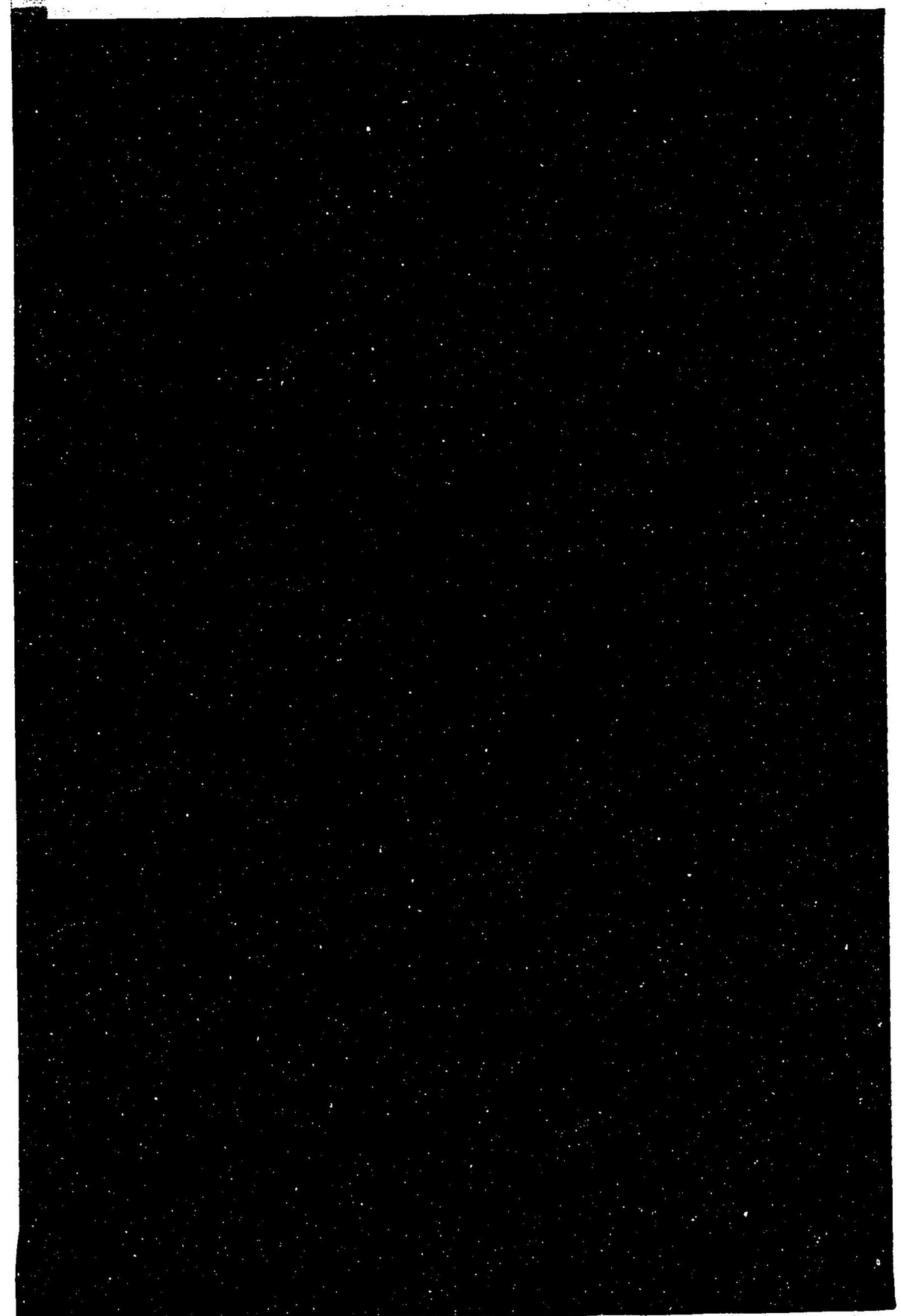
發行者　偉業館主　岡本仙助
大阪市東區北久太郎町四丁目百二十八番屋敷

印刷者　大阪製本印刷株式會社
代表者　矢野松之助
大阪市西區阿波座一番町六十番屋敷（電話七六四番）

發行所　大阪市東區北久太郎町四丁目百二十八番屋敷　岡本偉業館

俳諧百哲傳
版權所有

H5023



76
175

087351-000-2

76-175

俳諧百哲伝

竹の屋　世外／編

M30

DBE-0642